

常磐松文庫蔵 『鷺流狂言伝書』 一六四点

竹 本 幹 夫

本学常磐松文庫蔵『鷺流狂言伝書』のうち『狂言記』27冊を紹介し、あわせてその内容の一部を翻刻する。

本書は笹野堅氏旧蔵本であり、現状は前記『狂言記』の他、「役別狂言セリフ」5包み114点、「狂言謡」3冊、「間の本」14冊、『狂言アシライ森田流笛ノ譜』『唐音』『鷺狂記』『狂言位付』『書上語り小舞・書上之他狂言小舞』〔狂言授答
アシライ〕間名寄』各一冊からなる。笹野氏ご自身により、『文学』昭和十八年十月号に「能狂言の本文」と題する論考に「野中本」として紹介され、その後長らく所在不明となっていた（橋本朝生氏御示教）。なお笹野氏紹介の野中本の内、『小舞集』一冊については、本学の狂言伝書中には現存せず、『鷺流小舞集』と題して法政大学能楽研究所に現蔵される。

本書を野中本と称するのは、笹野氏の命名による。すなわち野中本の一部である「間の本」のうちに、半紙にその伝来を記した文書が添附されており、それに「野中儀衛門」書写の由を言うことによる。この半紙は現存しないので、『文学』誌上に笹野氏が引用されたものを以下に抄出した（句読点・濁点を私意で補った）。

是は散楽能の間の詞業を抄せる本也。協能式拾九品老冊は家翁の写させ玉ひたれど、式番目拾五番老冊、三番目三拾

番巻冊、四番目三拾貳番巻冊、五六番目三拾六番巻冊、都合四冊は、我叔父なる杉田吉次郎信義ぬしの写されたる也。抑此書五冊は寛政年間に出来しもの歟。我家文化十一年甲戌の九月八日の祝融に失せ果ぬべきを、其よりさき、今の野中儀衛門の写し取らん迪其宅へ持ていかれたるを此冊（そと）の命也ける。(中略) かゝる事に思ひ出て、又足らざるを補ふに、貳番目の修羅事式拾六番巻冊、三四番目三拾六番巻冊、都合貳冊を足して通計七巻とし、装訂表紙をも自ら製して家の什物となすものは、我後たらん人此道すかぬ人とても、親祖父はかゝる道をさへたどりきとしのばば、武家の式楽たる所以をもしらめとてのすさみ也けり。

嘉永三年庚戌 氷室ひらきてあくる日

小十人松前三郎兵衛組 吉見儀助(花押)

笹野氏はまた本書『狂言記』の本文注記にも、「野中儀左衛門」の控えである由を言うときられるが、そうした注記は管見に入らない。ただ「役別狂言セリフ」の包み紙の裏打ちの反古に、

平塚平兵衛・岩崎良右衛門・森田金吾・渡辺小右衛門・伊東伝八郎・服部市左衛門・水野一郎右衛門・若林栄助・太田祐助・出口隼三郎・青山弥惣右衛門・野中儀右衛門

の名が見えるから、「野中儀右衛門」が正しいのであろう。すでに笹野氏のご指摘のように、この伝書が観世座付の狂言で鷺宗家の仁右衛門家には甥筋の別家にあたる、鷺伝右衛門派の狂言詞章であることは、本文中に伝右衛門所伝の記事がしばしば見えるなどことから明らかであり、野中が伝右衛門の弟子筋であったろうことも確実視される。もっとも野中儀右衛門と本書との関係は、たとえ『狂言記』の記事に野中の「控え」を含んでいたとしても、笹野説のように野中の写本とは考えがたいように思われる。前記「間の本」の付属文書を文字通り解釈すれば、野中が一時的に借覧した吉見家伝来本をもとに、吉見儀助が増補したものであるということになり、野中は本来無関係ということになる。むしろ本書は吉見本と呼ばねばなるまい。しかもこの記事に見える間狂言本と本書の「間の本」とは、「脇能間」の曲目数が一致することを

例外として冊数・冊順・曲目数が異なり、儀助本を原態とすれば、本書「間の本」はその改装残欠本であろう。(7冊二〇四番に対し14冊一三九番が現存)。「間の本」の題記と筆跡とは何種類かが混在しており、しかも原本の冊順・曲順を踏襲せずに改装した形跡が明白であるが、その多くは『狂言記』の筆跡と共通する。あるいはこの半紙は「間の本」の一部の冊に本来付属していたもので、本書の全体と関連するものではないのかも知れない。前述の反古の文字の類のいくつかによれば、「花子へ女」、嘉永四亥年五月九日家元ニ而吉見相手」「水汲みへ住寺」、安政四丑年七月弓町にて」「入間川へ向」、安政五年十二月十一日彦根公にて」(いずれも「役別狂言セリフ」△印包紙)などのごとく、嘉永・安政年間前後に井伊家などの諸藩の能や観世大夫家の稽古能などに出演している記事が見え、これらが本書成立の時期を示唆しているようである。とくにははじめの例は、本書の全体が吉見儀助の編である可能性を否定するものといえよう。筆者は江戸在住の末流の女人の類でもあったのであろうか。なお後考にまちたい。

驚流伝右衛門派の狂言台本の主たるものには、享保保教本・宝曆名女川本がある。これらに対し本書は最も成立が遅れるものの、それらに匹敵する大部な内容で、他のいかなる狂言台本にも見えない珍曲を含めて右二本とは重複しない独自の曲をいくつか収めてもいる。しかもその多くは上演を前提とする演出注記を伴った記述であり、女人の稽古用台本であったことが明らかである。江戸後期の伝右衛門派狂言詞章の動向を知る上できわめて貴重といつてよからう。

『狂言記』書誌

(狂言台本) 27冊

117×167mm。共表紙仮綴横本。料紙楮紙。本伝書の各冊の大半が同型・同装・同料紙。表紙中央に題記と巻序、背小口にも巻序を記す。欠巻があり、第一〜十、十二〜二十一、二十三、二十九、三十一、三十三〜六の27冊が現存。各冊第1丁に目録(同筆)、右下に「中」字黒丸印あり。原則として各冊5曲を収め、各曲は9〜10行書。多くの曲に型付・衣装付等の演出注記や、異文の類を追記する。本文と同筆の付箋や書込み等も多い。曲ごとに改丁。全文ほぼ一筆。

【内容】(狂言記一)末広狩・宝の槌・隠し笠・鎧・福の神。墨付69丁。(狂言記二)麻生・三本柱・目近米骨・張章魚・煎じ物。墨付60丁。(狂言記三)大般若△右之通宝曆二壬申年十一月名女川辰三郎ト談相極。大般若・惣八・骨皮・小傘・飛越。墨付71丁。(狂言記四)靱猿・墨塗・雁盗人・秀句傘・文角力。墨付72丁。(狂言記五)鼻取角力・蚊相撲・粟田口・入間川・萩大名。墨付88丁。(狂言記六)鷄鴛・八幡前・水掛婿・舟渡婿△内題渡音。音曲婿。墨付67丁。(狂言記七)庖丁婿・岡大夫・二人袴・引敷婿・賽之目婿。墨付57丁。(狂言記八)布施無経・名取川・地藏舞・腹立ズ・金津。墨付67丁。(狂言記九)小傘・大般若・薩摩守・水汲新発意・啼尼△鹿野忠兵衛口伝・仁右衛門方ヒトリ言。墨付61丁。(狂言記十)路蓮△別筆か。骨草・宗論・花折新発意・飛越。墨付69丁。(狂言記十二)花見座頭・花見座頭・不聞座頭・不聞座頭△別筆か。川上座頭・井礮・鞠座頭。墨付84丁。(狂言記拾三)伊文字・法師が母△鹿野忠兵衛・大笑先生ノ名見ユ。千切木・箕被・髭櫓。墨付58丁。(狂言記十四)鎌腹・伯母が酒・釣針・内沙汰・吃。墨付61丁。(狂言記十五)業平餅・金藤左衛門・児流鎗馬・因幡堂・鬼継子・鬼のまゝこ。墨付59丁。(狂言記十六)祝詞神楽△是ハ本ヲ写候マ。祝詞神楽△嘉永四支年シテ相動候節改。鈍太郎△別筆か。太鼓負△付、祇園祭礼番付。比丘貞△別筆か。右流左止。墨付83丁。(狂言記十七)朝比奈・節分△元文三年三月廿三日松平大陣守殿御者中招請ノとき二日目伝右衛門之節分。八尾・首引・半銭。墨付56丁。(狂言記十八)清水・神鳴・ぬげがら・公事罪人△付、鯉の滝登・蓬萊山・西行桜。鬼争。墨付86丁。(狂言記十九)蛸・蟬・榮螺・通門・榮阿弥。墨付35丁。(狂言記二十)昆沙門連歌・蛭子昆沙門・大黒連歌・恵比須大黒・鉢叩。墨付44丁。(狂言記二十一)唐人子宝・唐人子宝△別筆か。唐角力・膏藥煉・替座頭・鍋ハツ鉢。墨付59丁。(狂言記二十三)三王・胸突・醉辛・土筆・米市。墨付59丁。(狂言記二十九)筑紫奥・勝栗・三人夫・寝代・臍山人。墨付61丁。(狂言記卅一)人馬・鬼瓦・今参・二人大名・懷中婿。墨付40丁。(狂言記卅三)いろは・しびり・あかざり・舟船・お冷し。墨付31丁。(狂言記卅四)若市・塗師・遊善・春朔・長刀会釈。墨付40丁。(狂言記三拾五)茶艱座頭△内題、茶唄座頭。伯養・魚談儀・無言行・重喜。墨付37丁。(狂言記卅六)鷄猫・紺屋吃・禁野・雁磔・帰替盃△内題、帰替盃。墨付39丁。

〔凡 例〕

- 一、驚流狂言伝書のうち『狂言記』所収曲より、享保保教本・宝曆名女川本のいづれにも未収の十二曲を選び、翻刻する。曲目選定に際し、田口和夫氏『天理善本叢書・驚流狂言伝書』解題の驚流曲目一覧表を参照した。
- 一、十二曲は次のごとく、五十音順で配列してある。
- 懐中婿・隠レ笠・金藤左衛門・鶏猫・紺屋吃・重喜・児流鎬馬・仁王・祝詞神楽・臍山人・箕被・無言行。
- 一、右のうち、〈祝詞神楽〉については、「是ハ本ヲ写候まゝ」と注記のある分と「嘉永四年亥月、シテ相勤候節改」とある分との二種の詞章が存在する。
- 一、翻刻にあたっては、句読点・濁点を補い、各役ごとにセリフを「」で括り、適宜改行して段落を設けた。
- 一、型付等の類は改行二字下げで示し、役名や謡い方法記の類は6ポ活字で所定の箇所を示した。
- 一、文字遣いは新字体を原則とし、「ムる」「ぢ」などは「ござる」「より」と書き下した。ただし、「躰」「哥」「罵」「升る」など、原本の字形をそのまま用いた場合も少なくない。
- 一、曲名見出しの下に(一ノ三)などとして巻序と曲順とを示した。その他校訂者注記の類はすべて()で囲み、又異文と認めうる墨減部は「」内に示した。
- 一、不備・脱漏の点は御寛恕のうえ、ご教示賜わればさいわいである。

懐 中 躰 (三十一ノ五)

鶴むこ同断、教手ノ方へ行。

ヲシエテ「先其方の舅の方へ居たならば定て引手物などが出るであらふが、夫を何にても懐中すれば能よ。」シ「扱ハ左様にいたせば能御座るか。」ヲ「中々。則是を懐中躰と言よ。」シ「夫ならば、こゝ参りまする。」

常の通り分れる。ヲシエテ大コ座へ行。シテ舅の方へ行。案内有。太郎立、いろ／＼言。何レも同断。正身のはな躰一人と云て舞台へ通り、常之通り言と、盃出し、舅呑デシテへ差。扱々からい御酒と云テ、又一ツ呑で、おごうが青梅を、いふ。舅へ盃をさす。

舅「ヤイ太郎くわじや、最前用意した物を出せ。」太郎「畏て御座る。」

三方の上へ弓のつるはづしたるをのせて、太郎持出、シテの前へ置。シテ取て橋がよりへ持て行、弓を懐より下へたてに入ル。扱下ニ居ると胸より出るゆへ、又出し、袖口より通し、両方へ手を広げて出ル。其内に舅、太郎を使におこす事、二度。三度目にシテ出、元の座へ直ると、舅の盃をシテへさす。右の手にて呑んとスル。呑れぬゆへ下ニ置呑。又舅へ盃を差。舅扣へた程に舞をまへといふ。是より引敷躰、又ハ二人袴の通り、下ニて舞、同断。夫ヨリ舅と連舞になる。三段の仕舞の処にて、舅へ右の手をやつと出て出すと、

男「是ハ何とめさる。」

ト跡へ引。又左りの手にて、

シテ「イヤア。」

ト出ス。夫より早くスル。

「是はめいわくな。ア、ゆるいてて被
下い。」

棒しバリのごとくにて、男入。太郎跡より。其跡ヘヲ

シエテ入。

シテ 段のし目。素袍。小サ刀。扇。

男 素袍。段のし目。扇。小サ刀。

太郎 嵐。狂言上下。こし帯。

教手 段のし目。上下。小サ刀。扇。

作り物 弓一張、但しつるをはづして。

隠レ 笠 (一ノ三)

宝の槌同断。アド主出テ太郎ニ云付、扱都へのぼり
売手ニ出合、段々宝の槌の通り。

「是が宝で御座るか。」「中々。」「是を宝と申ニ其子細が御
座るか。」「いわれこそ御座れ、昔シ鎮西八郎為朝といふ大
力の有た。我朝につゞく力が無と有つて鬼が嶋へ渡らせら
れ、鬼と力くらべを被成、其時の契約にハ、鬼が勝でも有
ふ成バ為朝を取つてぶくせうぞ、又為朝のおかちやつた成
バ宝葉のしま成隠レ簀に隠レ笠、打出の小槌、此三ツの宝
を取て帰朝召れうとかたう契約を召る。何がうでおしすね

をし首ひき、色々の勝負ニもことごとく為朝のおかちやつ
たに依て、約束のごとく三ツの宝を取て帰朝被成て御座
る。簀と槌とハたいてん致ス。其隠レ笠斗りハ都のてうほ
うニと有て残シ置れたを、直も能バ放シもせうかとの申事
で御座る。」「委細承り届ケまして御座る。とても事に眼
のまへにきどくの有宝をと被仰て御座るが、奇特が御座る
か。」「中々きどくこそ御座れ、夫を着れば人の目に見へぬ
奇特でおりやる。」「夫ハ調法な物で御座る。それ成ハこな
た着させられい。私の是で見ませう。」「夫ニ付ていよく
調法な事が有。夫ハ主を思ふ宝じやニ依て其主が着れば見
へぬ、又よの者がきれば見ゆる。早そなたへ売つた物じや
ニよつてそなたが着れば見へぬよ。」「夫ハ調法ニ御座る。
誰が着ても見へぬ事成れば宝でハ御座りませぬ。」「其通り
じや。」「夫成バ私の着ませう程に、此方夫で見て被下い。」
「心得た。」

ト太郎ハ下ニ居テかぶる。

「何と見へませぬか。」「どれどこにおりやる。」「是は、
是に居まする。」

ト云テはなへゆびさす。

「声ハすれどもかつて見へぬよ。」

笠ヲ取ながら、

「扱もく不思議な事で御座る。求ませうが代物ハ如何程
で御座る。」「二万疋でおりやる。」

是より又宝の槌の通り。太郎帰りてシテ柱ノきわへ置

て。

主立、常の通り。

「汝ハ初て都へ登り、見れバ古笠を求めてきた。是をバ置
て宝を見せい。」

トなげ出る。太郎いたゞき、

「南無宝く、是が宝で御座る。」「夫を宝といふにハ子細
が有か。」「中々いわれこそ御座れ。」

ト売手の通り言。

簑と槌とハたいてん致す。此隠レ笠ハ都の調法にと有て残
し置れたを、私の口調法を以てまんまと求めて参つて御座
る。」「夫ハでかいた。扱眼の前にきどくの有宝をといふた
が奇特が有か。」「中々きどくこそ御座れ、是を着れば人の
目に見へませぬ。」「夫成バ汝着て見い。某の是で見う。」

「夫ニ付いよく調法な事が御座る。是ハ主思ふ宝で御座
るニ依て、其主が着れば見へませぬ。是ハ此方ので御座る
に依て、こなたの着させらるれば見へませぬ、余の者が着
れば見へます。」「是ハ尤じや。夫成バ某が着よう程に汝
ハ夫で見てくれい。」「畏て御座る。」

ト云テ主ハ笠ヲ着る。太郎見テ橋がよりへのき、

是ハ如何な事どこもかしこもミナ見ゆる。何とした物で有
う。」「やいく太郎くわじや、早う見てくれい。何と見へ
ぬか。」「どれに御座るやら見へませぬ。」「何じや見へぬ。
がてんのゆかぬ事じや。」

ト笠ヲ取テ、

やいく兎角見共が見ねバ気が済ぬ。汝着て見い。」「こ
たニハお聞分のわるい事を被仰る。是ハ主おもう宝で御
座るニ仍て、余の者が着れば見へます。」「是ハ尤じや。

夫成バ汝に取する程に着て見い。」「申、か様のけつかふな
お宝物をいたゞきましてはいかゞニ御座り升る程に、最は
や仕舞ませう。」「是々平ニ汝に取する。着て見い。」「さ
いぜんも申通り私の戴ましても誰が持せて置ませうぞ。早仕
舞ませう。」「いや何といふても某が見ねバ気が済ぬ程ニ、
平に着て見い。」「此様なお宝ハいりませぬ。」

ト笠ヲなげ出ス。

「おのれハにくいやつ。入うと入まいと汝に取する程に
早う着て見い。」「夫成バ是非に及びませぬ。着て御目にか
けませう。」

ト云テ笠ヲ着て、

「夫々どこもかしこもミナ見ゆるハ。」「先御待被成ませ
い。紐をしめませぬ。」「夫々ミナ見ゆる。」

太郎笠ヲ取テ、

「はてがてんの行ぬ事で御座る。槌ニ見へぬはづで御座る
が。」「何の見へぬはづといふ事が有物か。」「申々、思ひ出
て御座る。是に着やうが御座る。」「何とするぞ。」

太郎笠ヲ両手ニ持、かぶり下ニ居る。

「是でハ見へ升まい。」

主扇ヲ打ながら、

「是々こゝが見ゆる。」

ト太郎ノ袖ヲ打。太郎ハ打所へ笠ヲやりて、

「いや見へ升まい。」是々こゝが見ゆる。「見へます舞。」

ト段々早く扇ニテ打て、

「おのれハにくいやつ。あのおうちやく者、やる舞ぞ
く。」

主 翁付ハ素袍のしめ、小サ刀。常ハ段のしめ、長

上下。

シテ 嶋物。狂言上下。腰帶。

売手 主同断。

作り物 菅笠。但シ笠当共一ツ。

金藤 左衛門 (十五ノ二)

「是ハ此傍りの者で御座る。此間ハ打つゞき仕合わる
い。今日ハ罷出仕合をいたそうと存る。惣じて山立のあひ
さつの詞が御座る。能物をこへ松といふ、わるい物を瘦松
と申。今日もこえ松の仕合を致そふと存る。則爰元が人里
も遠し、除場も能程に、是に待う。」

「童ハ此山のふもとに住者で御座る。山のあなたに親里
を持って御座るが、久敷見舞ませぬ程に、けふハ見舞うと思
ひ升る。山道とハ云ながらいつも通ひつけた道で御座るに
依て、人も連ずわらハ老人出て御座る。此度もゆるりと慰
うで帰らふと思ひまする。」

「やい／＼そこへ行女、おのれハどこへ行者じや。」「ど
こへ行ふともわごりよハかまいそ。」「其袋を置いて行け。」

「なふおそろしい事をいふ者じや。あたりに誰も人ハない
かなふ。」「ヤイ／＼何をかしましい事を云おる。是袋さへ
置いて行バ命ハ助けて取らせう。」「是ハ童が手道具で御座る
程に、進る事ハ成升まい。」「夫成バ命ともに取つてのけ
う。」「夫成バ進上。」「命をも取うと思へども、助てやる程
に早うどちへ成ともうせおれ。」「命さへ助て被下るゝ成バ
爰許にいる事でハ御座らぬ。」「夫成バ早うどちへ成とも行
け。まだそこに居おるか／＼。」

女、橋がよりへにげる。

此内に何が有ぞ知らぬ。

ト小袖ヲ取出シ、

是ハけつかふな小袖じや。女どもが上着をほしがつた程
に、先是を土産にいたそう。扱も／＼見事な鏡が有。女共
の鏡ハ錢のまはり程ないに依て、大きな鏡をほしがつた。
是をも女共に取らせう。まだ何か有ぞ知らぬ。かもじが有。
是ハ女共が猶々重宝じや。某の女房ハ髪が十筋斗り成らで
ハない。是をやつたらバ能らふ。紅ざら迄有。幸の事じや。
女共が口びるハ青いに依て常々見ぐるしいと思ふたに、此
紅を付させたらバ定てしほらしう成う。」

詞ノ内、女橋がよりよりぬき足ニ而出、長刀ヲ取。

「やいお男、能童がたい事の手道具を、能取うと思ふたな。
おのれたつた一打にしてやらふ。夫を返すまいか／＼。」

「やい、おのれハ其長刀をなぜに取た。こちへおこせ。」
「にくい事をいゝおる。早う手道具を返せ。かへさずハお

のれ切ころいてのけう。「おのれ女だてらだいたんな事をいふ。しかと長刀をおこすまいか。」

トにぎり小ぶしニテかゝる。

「まだ其つれな事を云おる。己れ其手を打落いてのけう。」ト急にかゝる。

「ヤイ／＼あぶない事をしおる。」「おのれがさいた刀をおこせ。」「女だてらに刀を何にするぞ。」「早うおこせ。おこす舞か。」「ヲ、やるぞ／＼、そりや。」「其袋もおこせ。」「サア／＼是も進すぞ。」「童をなぶつたがよいか是がよい

か、おのれがもと首を切はなさねばならぬ。」「ア、かなしや命をバ助てくれい。」「何じや命を助い。」「中々。」「夫成バ助て取せう程に童がのく方を見るな。」「中々見る事でハない。」

ト云テふして居る。女、道具を袋ニ入ル。

「見るな。」「いや見ハ致さぬ。」「まだ見おるか。」「ア、見ハいたさぬ。」「最早能のき時分じや。早うのこう。」

シテ、ソツト起テ、

(丸文字分疊減)

「是ハ如何な事つよい女哉。」「いつせきを取らた。」「すでに命迄取りやうとした。乍去あまの命をひらふて御座る。此様な時ハ急いでのいたがよい。」

ト除ク。笠ヲ見テ、

いや是に笠をわすれてうせた。せめて是成共着てゆこふ。」

ト笠ヲ持テ入也。

又追込ニモスル時、女、道具仕廻テ持、長刀ニのせ

んト云テ追込。

鶏 猫 (三十六ノ一)

アド「是は河野某^{かふの}で御座る。此中某が秘蔵のねこが見へぬ。何者ぞとらへ置たるか、又はころいて有か、にくい事にて有程に急度せんさく申付ふと存ル。」

ト云テ常之通り二人ヲ呼出ス。

二人「御前に。」「汝等を呼出事、別の事でもなひ。猫が今まで戻らぬ。定てとらへておきおつたか、又ハころいて有か、去込ハにくい事にて有程に、所々在々迄も高札を上げ、其上に念を入れて、ねこのありかを訴人致におみてハ褒美^はを望次第たるべきと、急度相触候へ。」ト「畏て御座る。地頭脇座ニ着ク。」

次郎くわじや。二郎「何事ぞ。」「いかさま此猫ハころいて有か、今日迄歸らぬハにくい事では有ぞ。」「されバ／＼、御てうあいの猫^{被成る}じやによつてお腹立も御尤じや。」ト「そなたハ高札の書付さしませ。某は在々迄觸うぞ。」「心得た。身どもハ札の事を云付う程に、そなたハ念を入れてふれさしませ。」

太郎くわじやハ太刀を持たながらふれる。

「皆々承り候へ。地頭殿の御秘蔵の猫が見へぬに依て高札を上させられた。此猫のありかを訴人致におみてハ御褒美ハ望たるべしとの御事なり。又隠し置におみてハ一類曲事と被仰出て有。其分心得候へ。」

トふれて座ニ下ニ居。子出テ名乗。

シテ「是本町に住居致者で御座る。私が親が地頭殿の猫とも存せずころいて御座る所に、殊の外御せんさくにて在々所々へ高札が上つて御座る。今ハ一門の者共泣かなしめども帰らざる事で御座る。天命のがれぬ身のうへの事で御座れば、他より訴人いたし一類迷惑に及ぶハひつじやうじや。余りに難義さのまゝに私の存るハ、他より訴人いたさぬ先に親の訴人に私が出うと存る。道行誠に親の訴人に子が出るとある事ハためし少ひ事なれども、余り身の置所のなさのまゝで御座る。

参る程に是じや。物申、案内ももう。」太「何者やら案内と有。案内とハ誰そ。」高札の表面に付て猫の訴人に参つて御座る。此由仰上られて被下い。「其申申上うざる程に、しばらく夫にまち候へ。」畏て御座る。」

太郎其通り地頭えいふ。
主「某しきに子細を聞うざる程ニ是へ通し候へ。」畏つて御座る。

じきに聞かせられうざると被仰るゝ程に、こぶく通らしませ。」畏て御座る。」

ト云テ地頭と向ひ合、ワキ正面ノ方ニ居ル。

「猫の訴人といふハ汝か。真直ニ申せ。褒美ハ望ミ次第に取らするぞ。」畏て御座る。御猫をころしたる者ハ、本町の其者の名をいふ何の何某と申者がころいて御座る。私訴人に出、人の命を取る事ハ十悪のとが人と心に存じながら、

私も一るひ多い者で御座れば、御せいどふの恐ろしさに背中中に腹はかへらぬと存じて訴人に罷出て御座る。」近頃寄特ニ訴人に出て有。其者をも見知り宿をも存じて有か。」
「中々、やどをも存じ其者をも存じて居まする。」左有バ取ニ人を遣そう程に、汝案内じや致、連れ来り候へ。」畏て御座る。」

「ヤイく汝等、あの者を案内者にて科人を召とつて来れ。又猫の様躰をも能見て来り候へ。」畏て御座る。

子にいふ。

左有バ案内をさしませ。」心得ました。」

直ニ一返廻りて。橋がよりへ行ても吉。

「わごりよハ果報な者じや。過分に褒美をとらしませうぞ。」身共ハ褒美の望も御座なひが、隠し置たらば一門のとがめが恐ろしさに訴人に出テ御座る。」心得て有ル。」

ト云テ楽屋へ入テ縄を掛けて連て出ル。其内子ハ橋懸りに待。地頭の前ニ連て出、親、地頭とむかひ合、ワキ正面ノ方ニ下ニ置ク。

太「召捕て参て御座る。又猫の様子を見申て御座る。いかにも殿様の御猫をころいて御座る。」

「汝ハ何とて某が秘蔵の猫をころひて有ぞ。」存も寄りぬ事、私ハ御猫をころしハ致ませぬ。」主「慥に訴人が有が左様に偽るか。」たとひ訴人御座ります共、御猫に置てハゆめく存じませぬ。」左様にあらそふならバ訴人を引合ふざるが、夫にても真直に申まじいか。」いか様に被

仰付るゝと御座りましても存せぬ事を申上り様も御座らぬ。願わくハ其訴人と有者を引合せられて被下ませい。」

「扱もくおのれめハ重々の科人じや。」

左有バ訴人に引合せ候へ。」太「畏つて御座る。訴の者急で出候へ。」

子出テ親と地頭と向ひ合テ居ル其真中ニ、正面向下ニ居ル。

主「則此者が訴人に出てあるが、夫にてもあらそひ申か。」扱ハ此者が訴人仕て御座るか。

思ひ入有。

何を隠しませうぞ、私がころいて御座りまする。「夫ハ何故ころひて有ぞ。」「私の秘蔵の鶏を取くらいまして御座るに依て、殿様の御猫とも存ぜざころいて御座る。此事人の存る事でハ御座りませぬ。」

ヤイ汝も能聞ケよ。最早親の訴人に汝が出うとハ思ハなんだ。このごとくに親をつみにしづめて御褒美に預り、幾万年の栄花をせうと思ふぞ。返つて其心ざしを不便におもふ。

誠に子故に私こそ咎におこなわれまするに、親の身なれば此上ながらも子を不便に存升る程に、此者を必らず助けさせられて被下ませい。」主「汝がいふに不及、子ハ忠節の者なれば如何程も褒美を取らせうぞ、汝は死罪に申付る程に左様心得い。」「私が儀ハ覚悟の前で御座り升る。子が命ハ助かりますとの御意を承りまして、弥あんど仕りま

して御座る。」

「いかに汝等、科人を急せいはいせうぞ、又子は何にても褒美を望候へ叶へてとらせうぞ。」シ「左様に御座らば御褒美にハ親の命を給り候へ。」是ハ思ひの外の事を申。

訴人に褒美を取せうといふも咎人の命をとらん為にて有間、此訴詔ハ叶ふまじい。何にも余の訴詔を申候へ。「余の訴詔としてハ何も御座ない。先御心しづめて聞し召され候へ。子の身として親の訴人に出ルとあるハためしすくない事に思召れうずるが、他より訴人仕ルにおゐてハ一類罪科におこなわせられ升ると有に依て、私訴人に罷出、御褒美に親の命を申請ふと存て、扱こそ子の身として親の訴人に出て御座る。御制札にも御褒美ハ望次第とかゝせられて御座る程に、御制札の通り是非とも御褒美に親の命を被下ませい。」主「夫ハ無理の望にこそあれ。よく合点を致候へ、他より訴人致て有におゐてハ親子諸とも成敗にいふれども、汝訴人致て有ニより汝が命を助け、其上に褒美を取するが、ひがことにて有か。」扱はしかと御免るしある間敷いにて候か。」中々ゆるす事ハ成らぬ事にて有ぞとよ。」シ「御褒美ハ望次第とかゝせられたる御制札もいたづらに成上ハ、是非なき事にて候。地頭殿の御望のごとく、私が命を御取り候へ。」

ト云テつかくと出テ、親の前にどうとなをる。

「昔より科人の命こそとれ、善人の命取ためしハ無ぞとよ。」シ「御褒美にハ親の命を乞へどもかなわぬ上ハ、重

ての御褒美の望にハ親子諸共御成ばい有て給へり候へ。」
其時地頭立テ少シ先出テいふ。

「扱もくははきたひのためしかな。昔より申ごとく、

物の哀れを知らざるハ木石のごとしといふ。如何に汝等、

色にていふ(六字分ゴマ点省略)しかも今年ハ我が親の、十三年に当りたれば、

咎ありとても助るぞ、(五字分ゴマ点省略)親子二人「夫ハ誠か」主「中々に、」

親子立うとふ「有がたの御慈悲や、く、とがをパゆるしおわ

します、なさけの程ぞありがたき、く。」

親「なふ和御料ハ子でハなふて命の親じや。こちへわた

らしませ。」

ト云テ子をおふてはいる。

△昔様にハ、私の祖父がねこを殺したると、孫訴人ニ出

ル。

ハ殊更ことしハ我親の、十三年に当りたれば、親孝行

の為といふことわりといふ、とが有逆もたすけ舟の、

ハ有難の御事や、く、慈悲有との御なさけ、天に

もあがるこゝちして、子の何某を肩ニかけ、帰るぞ

嬉しかりける、く。

地頭 のしめ。素袍。大臣多ぼし。小サ刀。

シテ子・太郎・次郎、三人とも

縞の物、或ハのしめ。狂言上下。腰帶。

太郎くわじや、太刀持出ル。但シ外ニ一人太刀

持出テもよし。

親出立 縞の物ニてもものしめニても。すぎ素袍。狂言袴。

こし帯。

紺屋 吃 (三十六ノ二)

シテ「是ハ此他りの者で御座る。某の頼ふだ人ハ大果報
人で御座る。追付目出度事が有ている程に、小袖上下を用
意せいと被仰付て御座る。小袖ハ次郎くわじやが承りて御
座るが、某ハ御上下を請取つて御座る程に、急いで紺屋へ
参つて申付ふと存る。先急いで参らふ。」

道行の言葉如何様ニもいふ。

参る程に是じや。物申、ていしゆおりやるか。」アド「表

に物申と有。案内とハ誰そ。是ハどれから御座りました。」

シ「こ、く、此他りの者じやが、そちへて、く、亭主か。」

アド「な、く、中く、て、く、亭主で御座る。」

「こ、く、是ハにくいやつで御座る。身共がも、く、物

いふ真似を致す。」

ア「こ、く、是ハいかな事。あれハ身共が物をろくにゑ

いわぬと知つてなぶると見へて御座る。」

シテ「ヤ、ヤイそこな者。」ナ、ナ、なんで御座る。」

「な、く、なんどくハ、なぜに身共のま、く、真似をする

ぞ。」ア「いやこ、く、此方ハなぜに、く、身共の真似

をしながら其つれな事をいふか。」

段々いふつりの、次第ニ埒明ず吃、後にハつかミ合

時、目代出、両へ分けて子細をとふ。いよく埒明

ず、口へゆびさし身をもたへ、云たがるてい色々口伝アリ。いか様ニも云合次第。

目代「何をいふても婿が明ぬ。是ハ両方とも吃にハきわまつたが、何とさばかふにも訳をいわぬに依て、わけてやらう様がない。何とした物で有う。いや思ひ出した。どもりも節の有事ハ自由に成物じやが、何とぞ謡ひでも哥でもうたふ事ハ成ぬか。」二人「ウ、ム、うたひ。」「謡が成ル。夫成らバ急いで謡ぶしにかゝつていへ。」二人「カ、カ、カ、畏て御座る。」
次第茶壺同断。

二人「思ひも寄らぬ口論に、く、同音することおかしき。」

地へ取。

色詞いもじ同前。

シテ「いでくさらば申さん、頼ふだ人の好みにハ、く、かちんに浅黄むらがけ、八千代をこめし呉竹の、雪を持たる所を、染てたもれ紺屋殿、」アド「お好の様躰心得申候、程なく染て参らせん、頓て御出候へと、」二人相舞「たがひにいぢをはりたる、しひしの色をなをしく、よくかた付てぞ帰りけり。」

二人「サ、ム、さらばく。」

シテ・アド共ニ

縞の物。狂言上下。腰帯。扇。

目代 のしめ。長上下。小サ刀。扇。

重 喜 (三十五の5)

アド「是ハ当寺の住持で御座る。某三日田舎へ参らふと存る。夫ニ付新発意を呼出し、留守の事を申付うと存る。」

なふく「新ぼち居さし升か。」シテ「ハア引。それがしを呼ばせらるゝハ何事で御座る。」ア「一段と早うおりやつた。其方を呼ハ別の事でもなひ。某三日逗留に田舎へ行程に、よふ留守をさしませ。」シ「畏て御座る。」ア「又留守の内に旦那衆のわせた成ば、いふまでハなけれども随分馳走してかへさしませ。」シ「心得まして御座る。」ア「夫ニ付、初て行に月代が殊の外はへて目ニ立。是でハ行れまい程ニ、ちやつとそつて呉さしませ。」シ「お安い事で御座る。唯今剃刀を合てそつて上ませう。」ア「夫ハ兎も角も早うそつて呉さしませ。」シ「畏て御座る。」

トアドハ真中ニ下ニ居る。

シテハシテ柱ノ所ニ而剃刀を合せる。

ア「なふ重喜。」シ「はア。」ア「身が留守の内に花壇の掃除をもせうず、又草花をも手入をして呉さしませ。」シ「心得まして御座る。いや申、剃刀も合まして御座る程にそつて進ませう。よふもませられい。」ア「心得た。」

トもむ躰。

急いでそつて呉さしませ。」シ「心得ました。」

トシテ立テ、アドの後ろへ行、つき当る。

ア「あいたくく。」

ア「ヤイ／＼／＼／＼何とした事じや。」

シテ驚いてアトへ下り、

シ「まつびら御ゆるされい。」ア「おのれハそそふなやつじや。どこにか月代をそるといふて師匠につまづくといふ事が有物でおりやるぞ。」シ「面目も御座りませぬ。」

ア「そちハ知るまいが、惣じて七尺さつて師のかげをさへふまぬといふ事がおりやる。以後を急度おたしなミやれ。」シ「はア。」

ト云テアドの後ろへ行、南無三宝といふて跡へ帰り、ア「何としたぞ。」シ「いやすでに此方の陰をふまふと致て御座る。」ア笑テ「さて／＼そちハ愚どんなやつじや。今いふたハ世のたとへといふ物じや。苦敷ない。早うそつて呉い。」シ「いやどう御座つても此方の陰をふみそふで成ませぬ。私の致し様が御座る。ちとまたせられい。」

ト後見座へ行、竹の先へ剃刀を付て持て出。

ア「夫ハ何とした事じや。」シ「されバ其事で御座る。

七尺さつて師の陰をふまずと申升るに依て、夫故加様に致升る。」ア「夫ハ尤でおりやるが殊の外あぶのふおりやる。苦敷無事じや程に是へよつてそらしませ。」シ「いや御氣遣ひ被成るな。少もあぶない事ハ御座りませぬ。」ア「夫成バあぶのふない様に随分念を入れてそらしませ。」シ「心得て御座る。」

シテ語「いで／＼かミを、そらんとて、」地「／＼、師のかげふまんと、いふことあれば、重喜ハ七尺、飛しさり、

剃刀づかを、長々とりのばし、およびごしにぞ、そつたりける。」アド語「師匠ハ是を、よろこびて、」地「猶／＼それや、よくそれやとて、居ねむりすれバ、」シ「重喜は師匠の、仰にしたがひ、」地「又かミそりを、引寄て、手合しながら、前を後口、うしろをまへと、逆刺に、鼻の先をぞ、そつたりける。」

アド「あいた／＼／＼。」

「其時師匠ハ、きもをつぶし、たゞずミければ、忠喜は面目、うしないて、あそこやこゝに、かゞミまわれバ、師匠は重喜を、とらゑんとおつかけ、ぼつめけるを、一飛にとんで、門前さして、逃行バ、せんかたなくて、うらめし顔にて、鼻をかゝへ、／＼て、眠蔵さしてぞ、入にける。」

シテ 小竊か無地のしめ。狂言袴。腰帶。へんてつ。

シテ 小竊か無地のしめ。

アド 白ねり袷かむじのしめ。衣。けき。中啓。じゆず。ごうし頭巾の上へ角頭巾ヲかぶり。

腰桶のふた。剃刀。竹の先へ剃刀を付、布にて卷。

兎流 鏑馬 (十五ノ三)

「是ハ此傍に住居いたす者で御座る。先召使ふ者を呼出して談合致事が御座る。やい／＼太郎くわじや、居るかやい。」ハア。「居たか。」御前に。「一段と早かつた。汝を呼ハ別の事でも。当年ハ加茂の祭りのとうが某じや。身

共ハ何レもと談合する御方がないに依て、そちと談合する。「誠に当年ハ此方の当で御座るニ依て、誰有つて御談合被成るゝ御方も御座りませぬ。」其通りじや。例年流鏑馬があるが、何レもの所で児にこまらせらるゝと聞たが、扱此児ハ何とせう。「されバ何と致たが能御座らふか。」「汝才覚をして呉い。」「されバ何とか能御座らふか。いや申、思ひ当つた事も御座れ共、申たならバおしかり被成ませう。」「やれ爰な者ハ。しかるも時に依た者じや。何成とも云てくれい。」「夫成バ申ませう。誰かれと申ても俄の事で御座るに依て、私の存升るハ、御かミ様を児に致いてハ何と御座らふ。」「ヤレ爰な者。只さへわゝしい者が其様な事をいふた成バかミ付で有ふ。」「と申ても先仰られて御覧じられい。」「其儀ならバ身共ハ云事ハ成舞。そちを頼程に云てくれい。」「夫成バ先其通り申て見ませう。」「能様に頼むぞ。」「心得ました。

申、御内ニ御座り升るか。」「童ハを呼ハ何事じや。」「御談合申度事が御座る。是へ御出被成ませい。」「何事じや。」「別の事でも御座りませぬ。明日ハ加茂の祭りで御座る。」「ヲ、あすハ加茂の祭りじや。」「夫ニ付て頼ふだ人の当で御座る。」「夫が何としたぞ。」「去レバ其事で御座る。例年流鏑馬が御座るが児が御座らぬに依て、此方少しの間児に成て御出被成ませい。」「ヤレ爰な者。其様な事が童に成物か。」「御尤で御座る。乍去御存の通り頼ふだ人ハ何レも様と中が悪う御座るニ依て、誰有て御談合被成御方も御座り

ませぬ。少の間で御座るニ依て御出被成ませい。」「何と云たりとも童が其鉢が成物か。」「先能御聞訳被成て御らふじられませい。此度児を出しませねバ頼ふだ人の恥で御座る。夫の恥ハ女房の恥で御座る。其うへ御顔の見へ升る事でハ御座らぬ。少の間で御座る程に、何卒御出被成ませい。」「実と汝が云通りこちの人の恥ハ童ガ恥じや。夫成バ兎も角もせうが、六ヶ敷事でへないか。」「いや別に六ヶ敷事でハ御座りませぬ。私の御側に居て御差図を致ませう。」「夫成バ兎も角もせう。」「然バ明日の事で御座るに依て、そろゝ御支度を被成い。先あれへ御出被成ませい。」「心得た。」

「申、御座り升るか。」「何事じや。」「其通り申て御座れば御合点被成て御座る。」「夫ハ近比満足した。」

「何レも御座るか。」「何事で御座る。」「当年ハ加茂の祭りの当ハ誰殿の番で御座るに依て、あれへ参らふ。」「夫が能御座らふ。」「サア、御座れ。」「心得ました。」「今日ハ天気も能御座つて一段の仕合でござる。」「其通りで御座る。」「いや何かと申内、早是で御座る。案内をこいませう。」「能御座らふ。」「

「物申、案内申。」「表に物申と有。案内とハ誰そ。」「物申。」「物申とハ。」「某でおりやる。」「是ハ何レも様、能こそ御出被成ました。」「其通り云て呉い。」「畏て御座る。」

や申、何レも様の御出被成まして御座る。」「何と皆のわせた。」「中々。」「かう御通り被成いといへ。」「畏て御座る。」

申、かう御通り被成ませい。「心得た。

先今日ハ御当目出度御座る。「何レも御揃被成て近比忝
ふ御座る。今日ハ天氣も能御座つて一段の仕合で御座る。」
「其通りで御座る。」「追付流鏑馬を始ませう。」「能御座ら
ふ。」「やい太郎くわじや、御児を同道せい。」「畏て御座る。
さらばかふ御出被成ませい。」「童はいやじや。」「是程に
思召立られて御座る程に、是非共御出被成ませい。」

御児を同道いたいて御座る。」

「さらば始ります。御覧じられい。」

「あたり。」「今のハ何とやら合てん参りませぬ。」「いや
左様でハ御ざらぬ。しかも星で御座る。」「太郎くわじや、
星じやと云か。」「星〜。」「さらば目出度。今一筋遊バシ
ます。御覧じられい。」「取わき只今のは地をすりました
様に御ざつたが。」「能あたりました。」「左様で御座る。
さらば目出度御盃を致う。ヤイ太郎くわじや、盃を持
て。」「畏て御座る。」

酒盛有。

「扱大事の御児で御座る程にかへしませう。やい太郎冠
者、御児を同道せい。」

「いつもあとで御児の顔を見ます事で御座る。少御児
の顔を見せさせられい。」「いやは去御寺の大事の児じや
と被仰て、顔を見する事ハ成ぬと申されて御座る程に、成
升舞。」「実と太郎くわじやが云通りで御座る。」「いや〜
左様でハ御座らぬ。此前の当の時も、しかも此方の見させ

られたでハ御座らぬか。是非とも見ませう。」「いや〜ど
ふ御座つても見する事ハ成ませぬ。」「平に見ませう。

是ハ如何な事、女房で御座る。」「其通りで御座る。」「ア
ノ恥ハどうした物で御座る。扱も〜おかしい事で御座
る。サア〜何レも、御座れ〜。」

「ヤイわ男、此様に童に恥をあたゆると云事が有物か。」
「某ハ知らぬ。太郎くわじやがした事じや。」「ヤイ太郎く
わじや、此様に若者に恥をかゝするといふ事がある者か。」
「私でハ御座らぬ。頼ふだ人で御座る。ゆるさせられい。」
「何の、ゆるすといふ事が有物か。どれへ行ぞ。取らへて
呉い。やる舞ぞ〜。」

二 王 (二十三ノ一)

シテ「是ハ此傍りニ住居致者で御座る。某何共渡世の送
り様が御座らぬに依て、他国を致うと存る。夫ニ付、こゝ
ニ御目被下るゝお方が御座る程ニ、お暇乞ニ参らふと存て
罷出た。先急いで参う。誠ニ妻子を振捨て参る様な口おし
い事ハ御座らぬ。さりながら命さへ御座らば、又仕合を致
て重ねてあふ事も御座らふ。」

「いや参る程に是じや。物申、御案内申。」「表ニ物申と
有。案内とハ誰ぞ。」「物申。」「もの申とハ。エイそなた
か。」「中〜、私で御座る。」「そなたハ見れば旅出立じや
が、どれへ行し升ぞ。」「其お事で御座る。私も手前がふつ
と成ませぬにより、他国致し升る。」「是ハいかな事、身共

ハ又人に頼れて田舎など鳥渡行し升かと思ふた。夫ハに
 がしい事じや。何とぞ爰許に留置たい事じや。」「扱く忝
 い御意で御座り升る。常々お目下されまする故、其御礼お
 暇ごひかれこれニ参りました。山の神や悴が事を頼ミ上
 升る。最早かふ参り升る。」「まづ待しませ。身が所へそ
 の出入すると云事ハ誰知らぬ者ハ有舞。」「其義皆様の御
 存で御座る。」「されバそこじや。某迄の外聞じやに依て留置
 たい物じやが、そなたも知る通り身共も近年ハ手前が成ぬ
 ニ依て合力もならず、気の毒な事じや。」「いや左様ニ御意
 被成るれば迷惑ニ存じ升る。今迄身命をつなぎましたも、
 皆此方のおかげで御座り升る。其段ハ何方へ参りましたも
 御恩は忘れハ置ませぬ。忝ふ御座り升る。」「いやお礼迄も
 おりない。何とぞ分別の有そふな物じやが。なふ能事有
 有。」「いか様な事で御座り升る。」「別の事でも。惣じてそ
 なたハ物真似が上手じやニ依て、わごりよを仁王ニ拵へ
 て、当所の上野へ連ていて、今度天よりあらたな作の二王
 がふらせられた程ニ皆々お参りやれと、よそながらふれた
 成バ、老若ともニ群集せう。定めてさいせんが有う程ニ、
 是を取て元手ニしたならば能らふと思ふが、何と二王に成
 らしませぬか。」「扱く能御分別で御座る。いか様ニ成と
 も頼上ます。よからふ様ニ遊ばされて下されい。」「何が
 扱身共ニまかさしませ。」

最早よい時分じや。いざおりやれ。」「心得ました。し
 て、何も道具ハいりませぬか。」「いかにも少入物が有が、

身が所ニある。持て行う。少お待ちやれ。」「心得て御座
 る。」

アド、道具を持て出、

「なふく是ニ能物が有ハ。」「夫ハ嬉しう御座り升る。」

「サアくおりやれく。」「参り升るく。」

此様ニ何角と御世話ニ成升る段、御礼の申上ませふ様も
 御座りませぬ。」「其段ハ少しも苦敷おりない。イヤ来る程
 ニ上野じや。大かた此傍りがよからふ。拵らへさしませ。」

「心得ました。手伝ふて被下い。」「心得た。」

ト云テ肩衣を取テ肌をぬがすると、下ニじゆばんを着
 て居る。扱頭巾をかぶせばちを持せて、前ニ腰桶ノ蓋
 を明テ置。尤みの上へかへして置なり。

「何と能御座るか。」「大かたよい。去バ先其躰をして見
 さしませ。」「心得て御座る。」

ト云テ二王のまねをする。

「なふ其儘の二王じや。」「何と似まして御座るか。」「其儘
 でおやり。かまへてあらわれぬ様ニさしませ。」「畏て御
 座る。さいせんを取ました成バ御目ニかけませう。」「夫を
 待事でおやり。身共はこの様子を触うぞ。」「頼みあげ升
 る。」「心得た。」

是よりシテハ大臣柱の方にて二王の真似をして居ル。

アドハシテ柱ノ方ニテフレル。

ヤアく皆々お聞きやれ。当所の上野へあらたなる作の
 仁王の天よりふらせられた程ニ、皆々お参り被成いや。」

ト云テ太コ座ニ居。

立衆、橋がりにて、

「何れも御座るか。」「是ニ居り升る。」「承われバ当所の上野へ天よりあらたなる作の二王のふらせられたと申程ニ、参つておがミ升まいか。」「誠ニふしぎな事で御座る。参つて拝ませう。」「サアく御座れく。」「心得ました。」

「何と思し召ぞ。か様な目度御代成バこそ、天より二王のふらせられて御座る。何と奇代な事でハ御座らぬか。」「其通りで御座る。」「是ハ早上ので御座る。彼二王はどこに立て御座るぞ。されバこそ是ニ立せられた。扱く殊勝な事でハ御座らぬか。」「誠ニ是ハ作と見へ升る。」

立頭立衆ともおがむ。

「私ハ立願ニ則脇差をあげませう。」「身共ハ此帯を上ませう。」

又さいせんなど上ル。其外いろく上ル。

「最早下向致ませう。」「夫が能御らふ。」「申、宿へ帰り皆若い衆へ此由を申て、明日ハ大勢連て参りませふ。サアく帰らせられい。」「心得ました。」

ト皆々幕へ入。

「なふく嬉しやく。先是を持って参り、見せませう。定て悦ませらるゝで御座らふ。」

「いや是じや。申、御座り升るか。」「誰でおりにやる。」「私で御座る。」「こなたか。して仕合せハ何とおりにやる。参りハ有たかの。」「中々、殊の外参詣が御座つて、此様なけつ

こふな物を数多立願ニ上ると申て置いて参りました。」「誠ニさまざまの物が有。夫でそなたハよかるふ程ニ、内へ帰つて内儀ニ見せさせませ。」「尤左様でハ御座り升るが。申、物で御座る。」「何事ぞ。」「参りの衆が帰らるゝ時ニ申され升るハ、此由を皆々へ知らせて明日ハ大勢連て参らふと云れまして御座る程ニ、身共ハ参つて又してやりませう。」「なふそなたハ欲の深い人じや。最早夫で能程ニひらに置しませ。」「いや左様でハ御座りませぬ。皆殊の外殊勝な事じやと申て御座る。早速なわります。私ハ参り升る。」「是々かまへて入ぬ物じや。最早置しませ。身共ハ知らぬぞ。」

ト云テ太コ座ニ居ル。シテハ小廻リスル。

「いや此様ニ毎日く参りが有様な事成バ、某ハ有徳ニ成で御座らふ。いや参る程ニ是じや。かの躰を致う。惣じて仁王ハ、あんの二王うんの仁王と申て御座る。此度ハうんの仁王に成うと存る。」

ト云テ二王の躰をして居ル。

扱はハ、参詣が遅ひが。」

ト云テ幕ノ方ヲ見て、立衆出ルト、夫を見テ其儘二王の躰ヲスル。

立頭「サアく御座れく。」「参り升るく。」「何と思召ぞ、天より仁王のふらせらるゝといふ事ハ不思議な事でハ御座らぬか。」「仰らるゝ通り、ふしぎな事で御座る。」「はや是で御座る。さらバ拝ませう。」「夫が能御座る。」

「私で御座る。」「誰ぞと存じたれば此方で御座るか。能こそ御出被成て御座る。」「今日ハ吉日で御座るに依て御祈禱ニ参りました。」「夫ハ忝ふ御座る。先かふ通らせられい。」
「心得て御座る。」

ト云テ舞台ノマンナカより少脇正面ノ方ニ下ニ居ル。

神子「童ハ此傍りに住居する神子でござる。いつも当月ハ誰敷の方へ御神楽に参る。まづ急いで参りませう。道行私ハ旦那方数多持まして御座るが、あなたこなたで御ちそふにあひまする事で御座る。」

いや参る程に是じや。物申、御案内申。「又表に物申と有。案内とハ誰そ。」「わらへで御座り升る。けふハ最上吉日で御座り升るに依て、御神楽に参りました。」「目出度おりやれ、こちへ通らしませ。」「心得ました。」

ト云舞台へ通る。神主見付、詞を懸ル。又神子より詞を懸ルモヨシ。

シテ「ヤア御出やつたか。」神「中々、御神楽ニ参りました。」シテ「近頃目出度こそおりやれ。」

さらバ祝詞をはじめ申そふ。「夫を願まする。」

「抑いざなぎいざなぎの命、天の岩倉の苔むしろの上に
して、男女夫婦のかたらいをなし、一女三男をもふけ給ふ。
一女とハ天照皇太神宮の御事。左有に依て赤きを人間と定
め、黒きを牛馬と名付給ふ。一切の衆生を利益せんため、
中にも荒神と見へさせ給ふハ、雨の宮に風の宮、北にさい
ぐら鏡の社、浅間が嶽にハ福一万虚空蔵、惣じて日本六十

余州の大小の神祇、守らせ給へ、謹上再拜〜。」

神子「さらバ御神楽を始め升る。」一段とよからふ。

「お神楽こそ目出たふおわしませ。命長うちうよふのぞいて、」

ト神楽を舞。

「ア、かしましい。祝詞にまぎれて成てこそ。気の毒なやつがうせた。脇へのひたがましじや。」

ト云テ一ノ松カシテ柱か。又幕ギハモヨシ。

「夫当り来る年号ハよき年号、始り初メて白がねの花咲小がねの実なり、万物和合する時をもつて、つゝしミうやまつて申、謹上再拜〜。」

神主いやがり橋が〜りへ行と、大臣柱ニテ正面ムイテ、
「お神楽がかしましいといふて脇へのいた。猶近々と寄ませふ。」

ト云テソコニテ二段目和尚。

はるか成、沖にも石の見へけるハ、ゑびすのごぜの腰かけの石。

又神楽舞。神子、神主のそばへヨリテ右ノ如ク舞。神主いやがり、アソコ〜へ逃テ、再拜〜と言テ居ル。

神子ハ悦ビテヒタモノ追かけ、アタマノ上ニテ鈴ヲフル。神主弥〜いやがり、其内ニ神楽ニ少シノリ、又気がついて、

謹上再拜〜、のつとを申てすゞしめ申せば、神ハ納受

し悦び給ふ、きん上さいはいのく。

夫より又神楽ニウツリ、舞テシヤギリ留也。

へ千代の御神楽参らすれば、神も嬉しく思し召せ。

へてうよふ災難のぞいて息災延命、所も繁昌末さか

へけり。

神子、神楽を舞時、太コ座へ行、懐中より鈴ヲ出シ、左リノ手ニ末広ヒロゲテ鈴ノ先ヲ押へテ、シテ柱ノ先へ出テ初ノ和哥ヲ言出ス。左右ノ手ヲ開キ、少シ先へ出、又跡へ少引テ、目付柱ノ方へ角取テ、又大臣柱ノ方へ行テ角取テ、左リへ廻リザマニ、シテノツムリノ上ニテ鈴ヲ強クフル。其時シテ神子ノ顔ヲ見テ、橋がよりシテ柱へか行、一ノ松ニ下ニドウトロクニキテ、又祝詞ヲいふ。神子ハシテ立テ行と、其座ニテ小廻リヲシテ、鈴ヲグハラリくト鳴シテトメテ詞言。又二段目ノ和哥ヲ云。爰ハ大臣柱ノキワ也。扱拍子ヲ踏、左リノ方へ大廻リシテ、シテ柱ノキワへ来て、小サク小廻リシテ、シテの方ヲ見テ、左右へ乗テ見セル。シテハ神子ノ方ヲ見テ少シジツ、移リテハ、又構ハズ祝詞ヲ言。神子ハ鈴ヲ左右へ振合テ、鈴ヲ前へ振り、扇ヲ後へアテ、鈴振テ見セル。シテモ夫ヲ見テ、移リ乗リテ立フトシテハ、又シラヌ顔ヲシテ下ニ居テ祝詞ヲ云。二三度も乗テ立フトシテ、夫ヨリ立テ神子ノ真似スル。神子、跡ノ方へ左リノ足揚テ、右ノ片足ニテソロく跡ジサリニシテ笛座へ行。シテモ神子ノ通りニシ

テ、シテ柱ノ先へ出ル。互ニ乗テキテ、夫ヨリ入替リ、神子ハシテ柱、シテハ笛座ノ上ニテグハツシ三度シテ、又元ノ座へ入替リ、面々ニ小廻リ、正面向テ鈴ヲ振分ル。両手左リへ出ス時ハ、左リノ片足アゲル。白ハアヲ向テ右ノ方ヲ見ル。又左リノ方へ両手ヲヤル時ハ、右ノ片足上ル。白ハ左リノ方向ク。四五度も如此ニ振分ケテ、夫ヨリ神子先へ立テ、シテ跡ニツキ大廻リシテ、面々ニ小廻リシテ正面向ト、シヤギリ留也。

神楽ノ事、近頃改ル

シテ柱ニテ和哥ヲ揚、正面へ鈴振出ル。跡へサガリ、扱見付柱ノ方へ行、右足引テ又大臣柱ノかたへ行、右ノ通り大廻リニカ、リ、神主ヲ見付テツムリノ上ニテ鈴ヲ強ク振ル。其時シテ御子ノ白ミテ、立テシテ柱へ行テ下ニキル。御子又シテ柱ノ方へ廻リ行ク。右ノ通り、シテ耳ヲフサギテ一ノ松へ行、下ニキルト、御子ハシテ柱ニテ鈴ヤメテ詞言。ソコニテ式段目ノ和哥ヲいふ。橋ガ、リノ方向テ、左右へ呼出シ、是ヨリ本書同事。

シテ 神主

小縞厚板。狂言袴ク、ル。大臣多ほし前折。腰帶。幣。

又、布衣ノ出立、浅黄指貫、風折黒也ニテモ。

アド 神子

箔着流シ。白練水衣、帯セズ前ヲ針ニテトデル。側継ノ後ロヲハナシ、前ヲ腰帶ニテシメテヨシ又ハ側継無シニモスル。鈴。かづら。はね元結。末広。鈴ノ柄ニ総付テモ吉。かづら掛様ハ、耳ヲ出シテ掛ル時ハ鬢帶ヲスル、耳ヲ出サズニカケル時ハカヅラ帶ナシニスルモノ也。御子ヲシテニスル時ハ乙ノ面カケル。水衣ハ白シケニテモ。

テイ主 段のし目。長上下。小サ刀。扇。

嘉永四亥年、シテ相勸候節改(朱書)

祝詞 神楽 (十六ノ二)

「是ハ此傍りに住居いたす神主で御座る。いつも当月は誰殿の方え祝詞に参る。則今日ハ参うと存じて罷出た。先そり〜と参う。イヤ身どもの参つて御祈禱いたす旦那衆ハ、御子孫も繁昌被成、次第〜に有徳にならせらるゝに依て、某を仏神の様に思召事で御座る。

イヤ参る程に是じや。先案内を乞う。物申、御案内申。」「いや表に物申と有。案内とハ誰ぞ。」「物申。」「物申とハ。」「某で御座る。」「此方で御座るか。能こそ御出被成て御座る。」「今日ハ吉日で御座るに依テ、御祈禱に参つて御座る。」「夫ハ忝ふ御座る。先かふ通らせられい。」「心得て御座る。

ト入替り下ニ居テ、

何と御案内ハ替らせらるゝ事も御座らぬか。」「替る事も御座らぬ。」「子供衆は皆御息才でおりやるか。」「一段と息

才で御座る。」「そふで御座らふ共。某が御祈禱するに依て其筈で御座る。」「誠に此方の御かげじやと申て皆悦びまする。」「左らばのつとを始メませう。」「夫を願ひ升る。」「

ト云内、神子出ル。亭主ハ其座ニ居てもよし。又元ノ座へ来テモよし。シテハカマハツ祝詞を初ル。立居ニテ三拜、柏手ニツ。天のもろてむすび、十たからむすび、御へいにて左右を払ひ、

「抑々伊弉諾伊弉册の尊、天の岩倉の苔むしろの上にして男女夫婦のかたらいを成し、一女三男をもうけ給ふ。一女とハ天照皇太神宮のおんこと、高天の原に神留り座す皇親神漏岐神漏美の命を以て八百万の神等を神集に集賜ひ、神議に議り給ひて、吾皇御孫の尊をバ、豊葦原の水穗の国を安国と平らけく所知食と、事依し奉りき。如此依し奉りし、吐普加身依身多女寒言神尊利根陀見波羅伊玉意喜余目出玉ウ、謹上再拜〜。」「

ト、此内神楽初ル。神子ハ、シテト亭主ト談合スミ、夫ヲ願ひ升るトいふ時分出、橋がよりニ而名乗。

「童ハ此傍りに住居する神子で御座る。いつも当月ハ誰殿の方へ御神楽に参り升る。先急で参りませう。来る程に是じや。

ト橋がよりより舞台へ案内、

物申、御案内申。」「又表に物申と有。案内とハ誰ぞ。」「わらハで御座り升る。」「能こそ御出やつた。」「けふハ吉日で御座り升るに依て、御神楽に参りました。」「近頃目出度お

りやる。先かう通つていつもの通り御神楽を初メさしませ。」「心得ました。」

ト亭主ハ大小ノ前ニ居ル。神子ハ太コ座ヘ行、懐より鈴を出し、扇ひろげ、鈴ノ先ヲおさへ、シテ柱ノ先ニテ扇ト鈴ヲ一所ニ寄テ居テ、

お神楽こそ目出たうおわしませ、命長うち^{ちゅうよつろぞ}中殃除ひて、

ト云ト笛吹出ス。鼓モ神楽初段。和哥ヲ上、両手ヲ左右ヘ高クひらき、正面へ出、左右ヘ下テ、振分ケながら跡ヘ下り。爰ニテ詞かくる。若、詞かゝり様遅クバ、小廻リシテモヨシ。シテハ神楽を少し聞テ、ア、やかましいと云様な顔して、亭主ヲ呼。

「や、申。」

立テ、

「何事で御座る。」「先あの神楽を待と被仰れい。」「心得て御座る。」

ト神子ノ方ヘ向テ、

いやのふく先其神楽を待しませ。」「心得ました。」

シテ大臣柱ノ方行ながら、

「申、一寸是へ御座れ。」「何事で御座る。」「別の事でも御座らぬ。祝詞を上るにあの神楽がまぎれてわるいに依て、やめいと被仰れい。」「心得て御座る。」

いやのふく。奥に神主の御座るが、祝詞を上るにまぎれてわるいに依て、神楽を止いと被仰る。」「尤左様でハ御座りませうが、のつと御神楽は別で御座り升るに依

て、かまわずと祝詞を上させられいと被仰れい。」「心得ておりやる。」

申々、左様申て御座れば、祝詞と御神楽は別で御座るに依て、かまわずと上させられいと申升る。」「かまわずと上い。」「中々。」「かまわずと上いといふ事が有物か。兎角止いと被仰れい。」「其様にも申され升舞。此方ハかまわずと上させられい。」「△」

「此方からして合点が行かぬ。まぎれてわるいに依て止いといふ事じや。扱もくにながししい。」

ト腹を立々、元の所へ来テ、下ニ居テ、又のつとを上ル。▲

△ト亭主ハかまわず神子ノ方へ来テ、

「さアく此方ハかまわずと神楽を舞しませ。」「心得ました。」

ト神子ハ神楽ニカ、ル。☆

シテハ腹ヲ立、下ニ居テ、

▲「謹んで念じ奉る。諸く^{もろ}の神たちの中にも、あらがミと見へさせ給ふ雨の宮に風の宮、北に齋宮鏡^{かよ}のやしろ、浅間がだけに八福一万虚空蔵、惣じて日本六十余州の大小の神祇、守らせ給へ、謹上再拜くく。」「

☆神楽二段目と哥

「はるかなる沖にも石の見へけるハ蛙^{つゝ}の御前^{ごぜん}の腰掛^{こせ}のいし。」「

初段同様、正面へ出、手ヲ下ゲ、左右へ振分ケ下り、

参る。道行別に海道も御座り、しかも是ハ難所なれ共、近道で御座るに依てさいく爰を通る事で御座る。」

トハンガ、リヘ掛ル。幕の内よりヨリツレ詞、
(二字衍)

「きかぬく。」又ツレ「先お待ちやれ。」

ト云ナガラ出ル。アドハキモヲツブシ跡へ逆ル。

「いやきかぬく。」又「是ハ如何な事、先気をしづめさせませ。」アド「是ハ何事じや。」ツレ「きかぬく。」

ト舞台へ押モドス。

アド「先何事じや。心を静めて訳を言ひませ。」ツレ「我御料ハ誰じや。」アド「身共ハ道通りの者じやが、先何事を争ハしますぞ。」ツレ「聞て埒の明ぬ事じや。代八めを。きかぬ。」アド「夫でハわけがわからぬ。」又「誠にさうあらふ。かうでおやり。」

我々ハミナ木こりに行者じやが、いつも山へ行て木を取、市へもていてうる者じや所に、同じ渡世を送るものにて代八、イヤ太郎といふいたづら者があると思ひませ。きやつを代八といふハ、我々八人が力があるといふ所で皆代八くといふ。きやつ近頃ハやゝもすれバ大酒をのふで、われくがこつて置た薪をやにハに集取て、けふハ先かつた、あすも又かるぞなどいふて、其儘市へもて行をる。けふも又この人達の木を取たに依て、やる舞といふたれば、何レもを打擲せうとした所を留て、是迄連て逃た程に、あのごとく腹をたつ事でおやり。」

ツレ「身どもハどふあつてもあいつを殺いて了簡がある。

なお構やつそ。」又「なふ無分別な事を言ひます。宿に妻子もある身でハ無か。先とくと合点させませ。」

アド「夫々身どもが分別つとしてやらふ。」ツレ「扱何とするぞ。」アド「其通りをお坊に成と書てもらふて、地頭殿へ出たならばよからふ。」ツレ「されバそこじや。日頃こそあれ、秋の堤普請、扱ハ冬の夫に行た時分も、又御坊に雇ハれても、我等よりもがいぶんはたらくに依て、あなたこなたミなきやつをひかせらるゝよ。」アド「扱く夫ハにがくしい事じや。」

ア、思ひ出いた。よい事が有。きやつは酒をのむか。ツレミなく「かたのごとくの大酒でおやり。」アド「力ハつよいの。」ツレミなく「夫ゆへわれくが口おしい事でおやり。」アド「身共が思ふハ、沢山に酒をしいて、酔た時分仕様がある。」昔く「よへバどうもならふが、醒たならば又意趣を返さるゝであらふ。」アド「氣遣ひさしすな。惣じて人の力の強いも、臍の垢さへ取れバ力が落るといふ。酔ふた時分に臍の垢を取てやらふ。」昔く「是ハ一段と能分別でおやり。去ながらこゝにハ酒がおりなひに依てなるまい。」アド「扱きやつハ山をおりたかの。」

ツレ「いやいつも爰ならでハ帰る道ハなひ。まだおりハせぬ。」アド「然らバ思ひ立日が吉日じや。誰也とも麓へ行て早う酒を取へおやり。今こそあれ、後々はめんくの仕合ではないか。」ツレ「たゞハえのむ舞。」アド「されバそこじや。最前物あらそふたわびごとに礼をすると言ての

まいたならば呑ぬ事ハ有まい。」ツレ「あいつに礼をする事ハいやじゃ。」アド「むざとした事をおしやる。きやつが力さへぬくれバ、跡でハいか程打擲せうとまゝでハおらないか。」ツレ「是ハなア。」ミナ「夫々。」一段の事でありやる。」ツレノ末ヨリ「身共が酒を買ふて来ふ。」ツレ「わごりよハ足が早いに依てたのむ。」ツレ末「まかさしませ。」

ト後見座ニキル。

アド「なふきやつが来てても何も言ずに身共に任さしませ。又身どもハ貞を知らぬ程におしへておくりやれ。」皆々「心得ておりやる。」

ト皆々笛座ニナラビ下ニキル。

シテ、鎌腰ニサシ、薪繩ニテ負フテ出ル。

シテ「なぜにおくるゝぞ。又休むか。夫ばかりの木を負ふて。さて〳〵役にたゝぬやつらでハある。身どもハ先へゆくぞ。」ツメ「調空しき谷の声、梢に響く山彦の、無声音をきく便りと成、声にひゞかぬ谷もがなと、望しも実かくやらん。」

ツレ見付テ、アドノ袖ヲ引ヲシエル。

ツレ「あれ〳〵。きやつで御座る。」アド「心得た。」

立テ腰カドメナガラシテノ前ヘ行。シテハ氣ツカヌ也。

アド「お礼申まする。」

シテ見テキモヲツブシ、悪太郎ノ尊丈ノヤウニスル。

アド「お礼申升る。」

シテフリ向テ、

「跡からハ誰も来ぬものを。」

口伝。

アド「こなたへお礼申升る。」シテ「身共に。」アド「中々。」シテ「夫ハ如何様な事で。」アド「先お待なされい。なふ〳〵。」

ツレノ方見テ、

こちへおりやれ。」ツレ「何事じゃ。」

トシテノ貞ミテ腹立ツ。アド叱ル。シテハコ、ロヅカ

又貞スル。口伝。

アド「シイ〳〵。しもに〳〵。」

ツレ貞見合セ、フセウト下ニキル。

アド「先其負ハせられた物をおろさせられい。」シテ「この儘でよふおりやる。」アド「いや〳〵。」

ト云テシテノ後ヘ廻リ、薪ノ紐ヲトク。シテオロス。

アド脇ヘオク。口伝。

アド「扱〳〵おびたゞしうおわせられた。誠にこなたハ天神で御座る。」シテ「身ハこらぬ。みな人がこつてくる〳〵。」

ツレ「あれ〳〵あの様な事をいゝおる。」アド「エヘン〳〵。」

扱申上る。私ハ此山の麓の者で御座るが、最前爰を通り掛りましたれバ、此人ミがこなたといさかいを致いたと申によつて、身共もきゝかねて、ミナ〳〵の無礼を詫ませうと存じ、」

ツレ「さうでハおられない。」アド「ゑへん〜。」

お待申ておりました。聞せられうならバゆるいて遣ハされませい。シテ「扱ミそなたハ奇特な人じや。」アド「ハア引。」シテ「先手をあげさせませ。」アド「是がよふ御座る。」シテ「身共が方にハ子細はおられない。いつもくるゝ薪をくれ舞といふに依て叱た斗じや。」

ツレ「何のくれう。」又「あのつれをいゝます。」アド「ゑへん〜。」

シテ「其方ハ風でも引しましたか。」アド「ちと咳気に御座る。この後ハ御意を背く舞と申升る。御ゆるされて被下れう成バ難有う存じ升る。」シテ「夫程にいふ成バきゝ届てやらふ。」アド「ハア。難有う存じまする。」

此中後見座よりツレノ末立テ、

「これ〜酒ハ買ふたが、かのいたづら者めハまだ来ぬか。」アド「ゑへん〜。いや夫ミ、いたづら者の事をお詫をする所じや。どれ〜是へおこさせませ。」

瓢タントリ、シテノ前へ持出ス。

アド「是がお礼で御座る。」シテ「是ハめいわくな。よふいふておくりやれ。」アド「ハア。」シテ「とても事に大儀ながらあの者どもに、身が内へもてゆけといふておくりやれ。」アド「ア、されバそこで御座る。かれらが申まするハ、お草臥でも御座らふず、爰で巷ツこし召るゝやうにと願ひ升る。」シテ「じや。」アド「中ミ。」シテ「夫成、バ是で開かふ。」

ツレ「近かつへめが。のミたふてこらへらるゝ物か。」アド「ゑへん〜。いか程かつへてもそなた衆にハのませぬぞ。さア〜上りませい。」シテ「是ハ慮外じや。」アド「沢山こしめせ。」

酒モリ口伝。アドムリニ巷ツ呑、大方シテニノマスル。アド呑テ小舞。コノム舞あり。クタビル、。

アド「つかれさせられたで御座らふ、お足をさすりませう。」シテ「いや〜おかしませ。」アド「殊の外肥させられた。」シテ「いや、そうもない。」アド「いかいお腹で御座る。定てこそばゆ御座らふ。」シテ「さふもおらない。」アド「いかひお臍で御座る。」シテ「何とあるか。是ハ何とする。」大勢押へ付ル内、アドニギリ手ヲ出ス。シテハベタリトスル。

アド「是ミ大きな臍の垢じや。」

カイデ

くさや〜。」

ト手バライスル。ツレ、ミナ〜立カ、リ、

「此頃木を取たがよいか、是がよいか〜。」

トニギリコブシニテ打擲スル。シテハベタリ、痛イ〜と斗リ。ヨツタルテイニテイ。

ツレ「どれ〜薪をもて行う。」ツレ「夫がよからふ。」

カツゲドモカツゲヌテイ。ミナ〜キモヲツプシ、

「扱〜強力じや、何とせう。逆も持れまい。よし〜此縄で引て行う。」ツレ「夫がよからふ。」

繩ヲトキ、引。

アド「身共ハ此鎌を所得に致さふ。」ツレ「迎もの事に手
伝うておくりやれ。」アド「心得た。」「ぬいや〜。」

橋がよりヘナラビ繩ヲヒイテユク。シテヤウ〜立テ、

シテ「ア、その薪耆把也ともくれさしませ。」ツレ「なん
の、おのれにやらふぞ。はなしおらふ。」

突コカシ、繩ニ取付。シテ又起上リ、

シテ「これ〜。」

ト取付。繩キル。ミナ〜ヘタル。キモヲツブシ立
揚リ、

ツレ「是非に及ぬ、かついでゆかふ。」

大勢ニテワヤ〜ヨロ〜カツギ入ル。シテノコリ、

「なふ〜ミなの衆。ア、早いなれた。」

酒は醒(ゴマ点省略)下、肌ヘハ寒し臍ハルの風。ヤアたび人

の杖枝ヲ見ハ、ヤア〜、無用の足を助け、大勢ツルのこぶしには、

自慢下の鼻ハルをひしぎつゝ、帰る姿下や山人ハルの、鎌下も薪下も奪れて、

行ハルこそなやめ代八も、足ハルよわぐるまめぐり来て、わがわる

さとぞざとりける、〜。ヨロ〜ト膝ハサガリ

一首よふだ。臍ハルの垢とられ力もおちこちのたつきなけれ

バ帰る柴人。仕なひたる形かな、やれ。」

シテ 縞モノ。金ナシソバツギ。ク、リ袴。コシ帯。

ヒゲ。燕尾頭巾。鎌腰ニサシ、タキ、負フテ出

ル。黒塚の通り。

アド 狂言上下。腰帯。小縞モノ。竹づへツク。

ツレ 縞力腰ガハリカ無地。モギ胴。ク、リ袴。コシ
帯。三人、四人、九人か。

作り物 ひやうたん。竹づえ。

箕 被 (十三ノ4)

シテ「是ハ此傍リニ住居致者で御座る。某不及ながら和
哥の道に志し、初心講を結んで御座るが、当月ハ某のとう
に当て御座る。夫ニ付先女共を呼出し談合する事が御座
る。のふ〜是の、居さし升か。」「童を呼せらる〜ハ何の
御用で御座る。」「用の事が有程に、先こふ通らしませ。」

女、笛ノ上。シテ、シテ柱。

「扱用の事と被仰る〜ハ何の事で御座る。」「別の事でもな
い。当月ハ某の連哥の当にあつた。押付何れもお出被成
る〜程に、其用意を召れい。」「扱も〜此方ハ、此ならぬ
身代でけふも連哥あすもれんがのと云て、何事で御座る。
ちと身代のつゞく様に被成い。」「和御料ハ連がとさへいへ
バ腹を立。此むぐらの宿へ皆御出被成る〜を嬉敷と思ふ
て、いふせき小屋のちりをも取、悦ぶ事を、其様にふき嫌
にするハ、和哥の道を知らぬ故じや。力をもいれずして雨
土をうごかし、鬼神ミをも和げ、たけき武士ものよぶの心をも慰
む。其方の様なふつゝかな人も成ぬといふ事ハない。道ハ
近きに有どこれを遠きにもとめ、事安きにあれど是を堅ニ

求むと云事有。哥ニも、植て見よ花のそだたぬ里もなし心がらこそ身はいやしけれと云。うつせばなに事も成。唐土の衝適ハ五十じにして始て詩を作られたといふ。我朝に住て其心のないハ、水に住蛙にハおとることじや。「いや蛙におとらふとミ、づにおとろうと連哥とさへ聞ば腹が立。いつぞやの当も童が手道具を代となしてよふく調たに、又其様な事をおくせらる。夫程成バ童ニ暇を被下い。「暇がほしくバやりもせうが、昔から哥をよふで徳の有事を語つて聞そう。「其様な事ハ聞たふも御座らぬ。「でも聞しませ。

兩人共下ニ居テ、

語り昔し小野の小町といふ人、ならびなき哥人にて有しが、其頃天が下大きに日照にて民の早苗も実のらず。君御なげき思召て、諸寺諸山の貴僧高僧に被仰付、大法秘法様々にして御祈禱有りけれ共、更に其印なかりしかば、公卿せんぎ有て、和哥の道にハ鬼神も納受ある習なれば、名哥をよみて龍神をなだめさせたまハ、国土の助けをなし申さんとせんぎあつて、小町を多らみ出され、神泉苑にて和哥をよみて龍神に手向奉れと宣旨有れば、其時小町、女の身にていかでか神慮をなだむる程の事有べきとも覚へずと辞し申されけれど、既に宣旨下りけれバ重ねて辞し申に及ず、神泉苑へぞ参られける。君も多いらん被成んとて神泉苑へ行幸なれば、公卿大臣供奉せさせ給ふ。誠に晴ヶ間敷事にてありし。小町ハめのと女の房に硯を持せ、池のみぎわに

立寄、しばらくくくうを礼し、筆を取、さら／＼と書下し詠じ給ふ哥に、ことわりや日の本なればりもせめ去とてハまた天が下とハ、加様によみ給へバ、さしもくまなき空俄に黒雲おふと見へしが、大雨しやじくを流し、きのふ迄かれにし早苗もたちまち青み渡り、民のうれいもなく、五穀成就し万民悦ぶ事限りなく、目出度御代と成る。其外紀の貫之・能因法師・加茂の長明、何レも名哥をよみて徳義多き事にて有ぞとよ。か様に難有和哥の道を何のかのといふ。ちとそちも心掛い。今でも徳の多い事じや。」

女立て、

「のふ腹立や、また此方ハ其様な事をいわせらる。是程わらハが嫌う事をすかせらる。兎角やめさせられい。止めさせられねば出ていぬる。置せられい。」「あゝらおのれハにくいやつ。某が日頃連哥ニ好て農作をおこたるゆへ身代が成らぬといふか。相応の利を弁へぬでハない。貧福ハ自然の物、果報ハ寝てまて。今少シ連哥をも仕習うて宗匠をもするならば、世を渡る便りにも成る。己ハ人の氣に当る差合も知らぬやつじや。先前句に連哥をやめよといふやり句を出す。あげ句に出て行ともいわぬに暇を呉いといふ五文字から合点がゆかぬ。己が様な奴ハ人倫たる者ハ近付まい。元来さきらしいのない某なればこそ今迄そふていたれ、常／＼氣に入ぬやつじやとはらみ句に思ふていた。幸ひの事、早うゆけ。「何の行ぬといふ事が有物か。」

女行を手ニテ留テ、

「のふく先まで。今のハミな当座のいはずてじや。其方が出よふといふも哥をやめよといふ枕詞じやと合点した。とかく夫婦ハ何事も同意せねば成らぬ。こういふてあさるからハ堪忍しておくりやれ。」何と被仰ても連哥をやめずバ出て行。」

女出て行を、シテ見送りながら言。

「誠に家貧にして親知すくなく、賤きにハ古人うとしと云が、身代ふりよくすれバ二世とかねた女房にさへ見捨らるゝ。貧ハ諸道のさまたげと云が誠じや。」

下ニ居テシテ泣。女立帰りシテ柱ニ立テ居ル。シテ見テ、

のふくそなたハなぜに帰りました。「暇を取にハ男の手前よりちりを結でも取る物じやと申程に、何成とも被下い。」シテ「追出すが印じや。」「そう云ては成ぬ、何ぞ被下い。」「そちが知る通り、何もやらふ物もない。柱成とも抜て行け。」夫と思ひ出た。やる物が有。

後見座より箕を持テ出テ、

是ハ朝夕手馴た物じや。これでも持て行。」女取テ「心得ました。」

箕を両手ニ持て肩へのせて、後ろより頭の見へぬ様に頭へ後ろから当て、橋がよりへ行を見て、

シテ「此ごとくなれどもあきもあかれもせぬ中じや。近所へ来たなら必らずよらませ。」「心得ました。」

橋がよりへ行を呼かへして、

シ「扱もく狂がつたなりでおりやる。のふく先待しませ。」「何事で御座る。」「まだやる物が有。戻らませ。」「心得ました。」

女、笛座の上通る。シテハシテ柱ニ立。

「其方なりに付て風と思ひ付いた。三ヶ月の出るぞおしき名残りかなといふ発句をした。覚えていて親達へおはなしやれ。」扱く此方ハまだ其様な事を仰らるゝ。聞とふも御座らぬ。乍去人に哥をよみかけられて返哥をせねば、今度の世にハ口の無虫に生るゝとやら申程に、今の脇を申ませう。」扱くこれハ珍らしい。何と召れた。「只今何とて御座りました。」「三日月の出るもおしき名残りかな。」女「秋のかた箕に呉て行らん。」

ト云テ行そふにスルヲ手ニテ留ル。

「先待しませ。夫程の心得ならば、よふ今迄ハ奥深く包ましました。夫程の心ていならば、今よりハ余所へ行ずに夫婦農業をいとなみながら連哥をして慰う程ニ、戻らませ。」夫ハ誠で御座るか。「中く真実じや。」「夫成バ童も誠に出て行たふハ御座らぬ。そふさへ成バ戻りませふ。」「夫は嬉しい。弥く是からハすハ繁昌し、五百八十年もおおふ。」中く、七廻りで御座る。「一段と目出度。いざ語うて帰らふ。」「能御座らふ。」

シテ「荒く目出度やくやな、和哥にハ神も納受の、く印、則夫婦の中立なり。」

又ハ声苺の内、ハ浜の真砂ハ、よみつくし尽すとも、

此道ハつきせめや、只持あそべ何事も、難波の恨ミうちかづけ、有し契リニ帰りあふ、事こそ嬉しけれ。

うらミといふ時、女に箕を被せる。シテ、左右ニテ留ル。是もうとふ也。

ハかういふてあざるからハ

ト、アサルトハ泣也。但シ人間の泣ニハ非なり。

鳥のアサルハ餌をかける事か。

ハ其方が云につれて、つい句ニいふておりやる口くさ

ミを、某が思ふたとハ裏表の違ひじや。とかく夫婦ハ何事も同意せねば成ぬ。

ハ又語りを抜てもよし。

哥ハ断りや日の本なればてりをしつ去とてハまた天が下

とハ

シテ 罵の物。狂言上下。腰帯。

女 箔。美男。女帯。

又シテ、長上下・小サ刀ニてもよし。

無言行 (三十五ノ4)

シテ「愚僧ハ讚岐坊と申、無言の行をおこなふ出家で御座る。某斗でも御座らぬ、今二三人行をおこなふ僧が御座る。少某存寄が御座る程ニ外の衆を呼出し申さふ。

皆の衆、御座るか。

常の通り。

扱かたぐを呼ハ別の事でもない。内々被仰た無言の行

を今日よりなされうとある。某も其内に成ませうと申かわ

いたれども、能々合点致て見升れば、左様に物のいふたい

を某ハ堪忍する事が成ませぬ程に、方々ハ兎も角も愚僧ハ

ゆるいて被下い。惣じて無言の行ハ末とげぬと申程に、某

の申にまかせて此行をやめ、何がなしに悪心を起さず、出

家を堅固にめさりやるまいか。」アド「扱こなたハ聞へ

ぬ。日頃四人心を合せて後の世もひとつ蓮と申かわした

に、其様な事が有ものか。どふ有ても無言の行を致さねバ

成ぬ。」「いや其方々衆ハ聞分ヶのない人じや。しんじつ無

言の行ハじゆつないでハないが、其苦勞な事をして難義を

しよふより、酒でもものふで浮世にりんゑせぬが仏じや。去

とてハよしにさしませ。」「夫々ふとゞきな、酒をのめ。」

「中々。」「中にも五戒の一、おんじゆ戒ハ、仏も深くいま

しめ給ふ事。兎角何と思召ぞ、此人に言葉をかわずハ無

益御座る。此方はかの行を始ませう。」シテ「扱ハ某のす

ゝめを不聞、今の行を致んとや。」「中々。」「扱ハ頼母

敷事じや。思ひ立た事を無にせぬハ御出家の行法じや。某

ハそなた衆の行の間々、湯茶の給仕成としておませう。」

「夫成頼むぞ。」「心得た。」

トアドハ大小ノ前ニ腰かけ、三人共無言の行。シテ、

橋がよりへ行、

扱も心づよく無言の行をする事かな。此三人ハ日頃心安

くするに、余り仏の道へ思ひ入たらバ某の酒の相手が有ま

い。何とぞなぶり落したいものじやが。思ひ出した。

ト云、後見座へ行、茶碗持テ出、三人へ、
茶を参れ。

三人とも順々にかぶりふる。
のどがかわかぶが。

などいふ。

いやか。夫成バよし。

又後見座へ行、盃。又扇ヒロゲても。

のふく、皆の衆へ、物いわずと酒を一ツ参るまいか。
是もいやじや。夜寒ながの。夫成バそれがしハ無言他言も
なしにひとり此酒を吞じやまで。

ト爰にて三人の前ニ居、三人を後に置いて小謡などうか
ひ、しばらく酒吞。

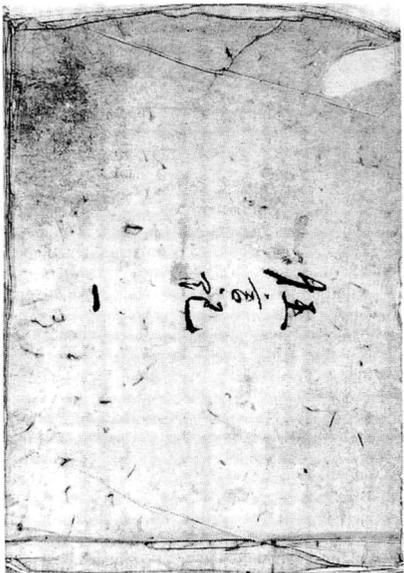
後ろの三人、口明、足ずりなどしてのミたがるて
い。後に内一人いまだおちず、外二人をいましめせい
するてい。其後三人とも前後も知らず吞たがる。其内
一人、ア、呑たい、といふ。アド、夫レ物をいふた。
一度にわらい出し、笑の内より、

四人「いちぢうにどつと、手を打わらつて、おん酒の昔
と、成にけり。」三笑の謡のきり。

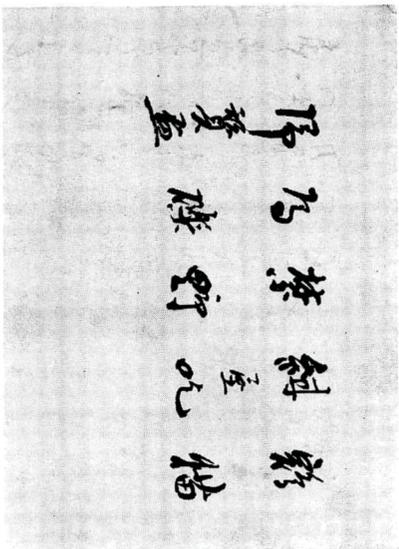
アド三人の名、本文に見へず。詞の内ニ一人くの名
を申か。四人出る故に四国の名を付申か。シテ讃岐坊。
アド三人、伊与坊・土佐坊・阿波坊。

シテ 白ねり裕。衣。けさ。角頭巾。中啓。じゆず。

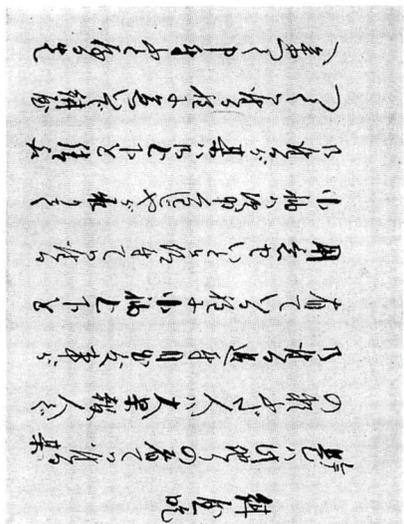
アド 出立同断。シテよりハ少しツ、替りてよし。



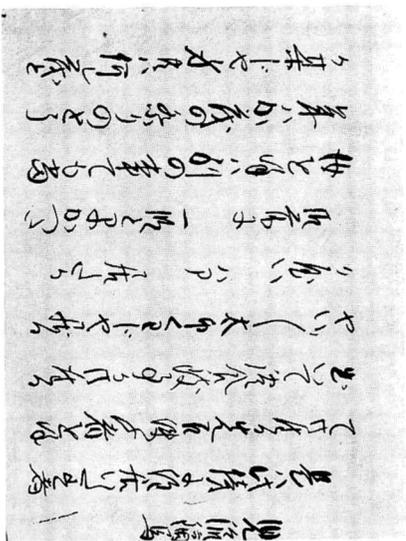
口絵7. 「黨流狂言伝書」狂言記・卷一（表紙）



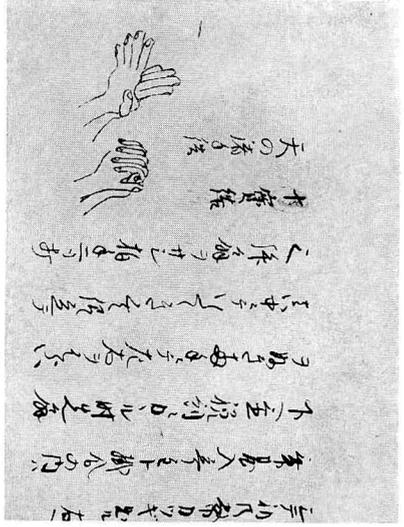
口絵8. 狂言記・卷卅六（目録）



口絵9. 狂言記（紺屋吃）



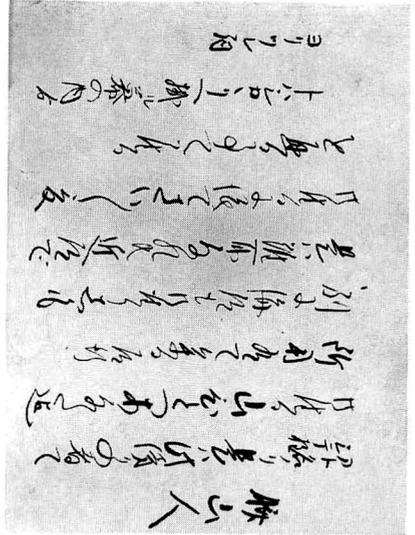
口絵10. 狂言記（児流鏝馬）



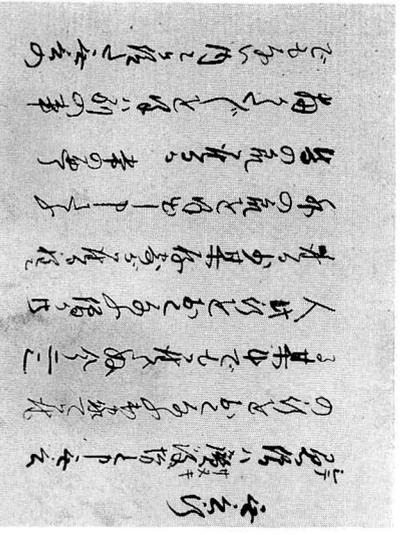
口絵11. 狂言記 (祝詞神楽)



口絵12. 同11



口絵13. 狂言記 (躰山人)



口絵14. 狂言記 (無言行)